

春燈

5月号

May 2018



主宰の句

安立公彦

寒明や月まだ固き宵の空

早春や櫂がまとふ朝の光

海風にふたたび熾る畦火かな

茂吉忌や『万葉秀歌』書架に古り

紅梅の夜は星辰と睦みをり



久保田万太郎の句

桑畑へ不二の尾消ゆる寒さかな

『道草』昭和二年

「久保田万太郎氏は僕の先輩である」と芥川龍之介が序文を書き出す。そして「久保田氏の発句は所謂人事の句が頗る多い。のみならず天文地理の句も大抵は人間を、生活を、下町の句を漂はせてゐる（中略）しかし久保田氏は旅中にあつても、やはり依然たる傘雨亭である」と右の挙句を掲げ、へ訝え返る隣の屋根や夜半の雨の祝句で序を結ぶ。句集の上梓は龍之介自裁二ヶ月前。

柴崎 甲武信

久保田万太郎の句

盆の月ひかりを雲にわかちけり

『流寓抄』昭和二十一年

この句は、ある方の結婚披露宴に詠まれたものです。披露宴なら、新郎・新婦から希望や幸せ、或は若さまで頂けるかもしれないのに、更に「盆の月」の登場。孟蘭盆の夜の月で、しかも満月です。この月は、雲に光を分かち暗くならないようにしているのです。「盆」のなせるわざでしょうか。「わかちけり」とは、この歳になつてしみじみと噛みしめる言葉です。

荻野嘉代子

燈下集



○ 佐藤 信子

万霊を鎮めて積もる春の雪
雪なだれ語り部は声潜めけり
風の便り待つ北窓を開きけり
咲きつぎて椿おもたき昼下り
とこしへの色即是空春の月（市川團十郎逝く）

○ 山内 四郎

一步二歩二月の月日歩み出す
節分のスーパールのレジ混み合へる
歩きけり手袋の手を振るとなく
ひろびろと黒々と冬耕され
山茶花やその花柄を身にまとい

○ 上山 永晃

柿落し待てず寒明に逝去（悼・團十郎）
ゆくところあるはしあはせ春立てり

波がしら春を運んで来りけり

芽柳や触つてみたき翁眉

囀りの恋の高みに迫りけり

○ 植田 利一

「りいちゃん」へ孫よりバレンタインの贈物
びつしりと砂を纏ひし若布これ
諸手に包みて春筍愛しかりき
芽吹き初めし辛夷に触れてみたきかな
風船かづら風の気儘を寛容す

薄氷の風に遊びぬ療

○ 柴崎 富子

伝芭蕉句碑の真偽や春の雪

春雪霏々今さら重き旅靴

近代史即自分史や涅槃西風

手ぐせなる旧仮名遣梅便り

○ 園部 路郷

千木の鷹横手盆地を睥睨す

町すべて見ゆるわが家の雪卸す

手負ひたる熊をかくまひ山荒るる

いつの間に喜寿のよはひや熊煮汁

殺生の禽獣の魔夢寒夜覚む

○ 松橋 利雄

往還の日向日影や寒見舞

籠絡を受くる余寒の独り言

追儼豆ひと握りほど炒りにけり

初蝶や爪切る音の昼下り

毛の国の小流れ春意満ちにけり祝上山永晃句集「鶴翼」

龍太忌やきさらぎの空甲斐の嶺々

○ 小島 禾汀

雛祀る東西南北部屋の何処

春一番瞬くもなく露座仏

さくら前線発つやみんなみ風便り

花待つや古木ひと日の照りかげり

○ 橘 正義

雪搔や長靴探しからはじまる

頬つべたを叩いて雪を搔きはじむ

大寒の空紺青を極めけり

幸せのこみあげてくる酢茎囁めば

寒月へ大きくつさめを飛ばしけり

○ 小林のり人

餅筵茶の間の廊下寒ぎけり

にはとりの止まり木高き雪月夜

図書館のベル十七時日脚伸ぶ

コピー機の詰り春寒抜けきららず

人通すだけの踏切路の臺

当月集

安立 公彦選



○ 宮崎 紗伎

ぬばたまの闇に雪積む母忌日
観梅の鼻梁に残る眼鏡あと
塗盆に残る干菓子や宗易忌
白梅の咲き重なりて溪の音
神鈴の紐の古りざま春の雪

○ 神田 恵琳

水底にやはらかき影薄水
白鳳の薬師詣でや春シヨール
産土神の春を讃ふる農具市
遠き日の畦今日の畦蚪蚪の紐
春めける人形塚の紫煙かな

○ 小山 繁子

音たかくゆたかに郷の雪解川
芽柳の薄暮ゆれつく川面かな
みちのくの災ひ今も春の潮
春日傘身をあましゆく通ひ路
春の虹島をいくつも跨ぐいろ

○ 齋藤 晴夫

仰ぎ見る真青の空や探梅行
鳴き竜の古墨薄るる梅の寺
白梅や光琳水のひかり添ふ
散りきらぬ梅の愁ひや朋友忌
白梅の的礫点じ鴉城

○ 石橋 邦子

春禽の飛びたつ川のにごりかな
北浦の波の青さや春一番
雛の灯をこぼせる路地や風すこし
捨舟の艫綱ゆるきおぼろかな
涅槃西風かへらぬ遺骨待ちにけり

春燈の句

安立 公彦選

はんなりと老いすすむ日や春隣

三重 上野 進

日の後は月の見回り千大根

万葉の春月傾く阿騎野かな

野火の尾を叩いては野火広げゆく

垣越しの世間話や木の芽風

ひと時の浄土と見たり春景色

菜の花や保育園児の昼寝時

山吹や指で辿りし其角の碑 (寺町)

梅の里猫の駅長客招く

薄氷や風なき空を月渡る

つきあげて音あたたかや紙風船

春光や木肌かがやく並木道

梅花祭白寿を迎へ事もなく

冬の空ぬける青さよ今日の日よ

埼玉 原田たづゑ

年祝花に囲まれ額届く

外庭に球根芽ぶくひそやかに

鳥雲に忘れられたる忠魂碑

賑やかな人声容れて山笑ふ

椿落つかすかな音を目が探す

また一つ重ねし齡さくら餅

梅が香や心しづかに忙中閑

梅が香にしぼし筆置く昼下り

大没日三分の梅を遊ばせり

春一番心の塵を払ひけり

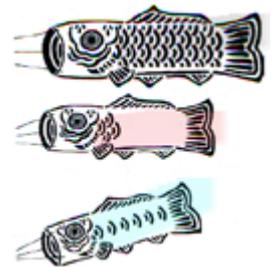
待ちかねて春を迎へに花屋まで

伊吹残雪枕カバーの洗ひ立て

啓蟄や地下街より人陸続と

水仙の海向きたるは魂しづめ

京都 懸林喜代次



兵庫 伊藤 百江

千葉 大湊 栄子

余言

安立公彦

くつろぐ作者の姿が浮かんでくるようだ。
「錫の銚釐」の語感がいい。「信濃酒」がいい。更にそれらを包み込む「春の夜」のつややかな気分がいい。この句、「銚釐」をよく生かし得ている。

梅の香の高きを見上ぐ梨屋の忌

木村 傘休

一歩二歩二月の月日歩み出す

山内 四郎

「二月」という言葉には哲学的な陰影を感じる。月の初めには立春があり、前日の節分で長い冬もようやく明けるといふ喜びに充ちた月である。しかし寒気寒風ともにその厳しさは周知の通り。北国では雪害も多い。その二月の月日が「一歩二歩」と「歩み出す」という。事実、日脚は確実に伸び、晴れた日の夕空の茜色は忘れていた大事なものが還つて来たような安堵の思いを感じさせる。「詩人山内四郎」のうた心が遍く読みとれる一句だ。

春の夜や錫の銚釐に信濃酒

末吉 治子

「銚釐(ちぢり)」は酒を温める銅真鍮又は錫の容器。春の夜を、錫のちろりに酒どころ信濃の銘酒を注ぎ、ゆったりと

川上梨屋の没年は昭和四十九年二月二十日、七十三歳。東京四谷生れ。十七歳で増田龍雨に師事、「花火吟社」に入門。「春燈」創刊からの先人である。久保田万太郎の小説『うしろかげ』に俳人盲魚として登場する。

昭和四十五年八月、『春燈集』第一巻が刊行。この合同句集は第四巻まで続いたが、梨屋の作品は第一巻のみに収録されている。(八重桜また逢ふ春のありやなし)。全十二句中から転記する。私が梨屋に見えたのは、昭和四十七年、中野青芽句集『草紅葉』の出版祝賀会の折だった。安住先生と並んで坐しておられたが、余りお元氣そうには見えなかった。挨拶も適わなかった。

この句、そういう川上梨屋への敬虔な思いが、「梅の香の高きを見上ぐ」によくこめられている。

春一番鶴翼の陣ゆるびなし

小張 志げ

今年の一月上梓された上山永晃さんの句集『鶴翼』への祝

句。「鶴翼」は陣形の一つでもあるが、この場合は長寿の鳥として古来尊ばれて来た鶴への敬愛の思いからの謂である。私も序文を書かせて頂いたが、その間国手という言葉が脳裡から離れなかった。『鶴翼』ははじめ下野新聞そのあと読売新聞の俳句鑑賞欄に取り上げられ評者のご高評を頂いた。「春燈」としても格別の思いである。

この句、『鶴翼』四七二句の緊密な内容を、強風にも緩びない姿として、作品のみごときを祝している。また見事な挨拶句と言えよう。

亀鳴くやこの世一人と思ふとき

岩永はるみ

俳句の季語には、「亀鳴く」「蚯蚓鳴く」「鷹化して鳩となる」など想像上の季語が幾つかある。辞書によると、亀は世界中に二百種以上が分布、爬虫類のうち最も起源が古いとある。日本では鶴と共に古来長寿の動物としてめでたいものと珍重されて来た。

この句、「この世一人と思ふとき」は全き真理だ。読後の印象も強い。ただかねては記憶に上らないだけのことである。さらに強烈な内容に比して作品から受ける思いが澄明なのは、季語の持つ大らかさの故である。

料峭の風に芯ある湖北かな

久保 久子

「湖北」は琵琶湖の北方。この地はまた作者の故郷でもある。

春寒料峭の候、ひとり湖北の地に佇つ作者。渺漠とした湖面を吹き来る風は春寒を通り越して、その風に芯の如きものを感じるのだ。「風に芯ある」が「湖北」と照応して、琵琶湖の奥行を思わせる。

この句を見ながら、昨年六月坂本で催された関西大会を思い出していた。淡海はもつと詠まれていい。

鳴き竜の古墨薄るる梅の寺

齊藤 晴夫

「鳴き竜」と言えば日光輪王寺薬師堂が有名だ。「鶯張り」もその一種。こちらの方は昨年十月の三ヶ日勉強会の龍潭寺にもあった。

掲出句は「梅の寺」とあるから、竜の天井絵も「古墨薄るる」古寺だろう。しかし古寺ながらその地の人びとに支えられた伝統ある寺だろう。手垢のつかない素朴な信仰の対象としての梅咲く寺の有り様が、よく表現されている。

涅槃西風かへらぬ遺骨待ちにけり

石橋 邦子

東日本大震災は二年を過ぎて、死者一万五八八一名、行方不明者二六六八名、避難者三二万五一九六名とある。報じる新聞には、被災地に祈る遺族の写真が大きく載り、見る人全てに明日のわが身を印象付ける。

掲出句、陰暦二月十五日、浄土からの迎えの風と言われる涅槃西風に、帰らぬ人を待つ姿が哀切な悲しみを誘う。